

社団法人 近畿建設協会 支援シンポジウム

“ 水源地の村 ” からの提言  
「 山に学ぶ、人づくり・地域づくり 」  
報 告 書

平成 19 年 10 月



財団法人 吉野川紀の川源流物語

社団法人 近畿建設協会 支援シンポジウム

“水源地の村”からの提言「山に学ぶ、人づくり・地域づくり」

2007年8月22日(水) 橿原市商工経済会館 7階大ホール

主催 森と水の源流館 (財団法人 吉野川紀の川源流物語)  
後援 国土交通省近畿地方整備局 紀の川ダム統合管理事務所  
奈良県教育委員会  
奈良県川上村  
川上村教育委員会  
橿原ロータリークラブ  
吉野川紀の川流域協議会  
協力 NPO 法人 奈良 21 世紀フォーラム  
「奈良 山と森林の月間」協賛イベント



---

## プログラムと目次

13:30	ごあいさつ .....	3
13:40	第 部 基調講演 .....	4
	前 登志夫 先生 (歌人)	
	「山に聞け! 山に学べ! 山に歌え!」	
15:00	休憩	
15:10	第 部 活動報告	
	「かわかみの森林は、みんなの先生」	
	辻谷 達雄 (森と水の源流館館長)「森林環境教育実習への思い」 ..	19
	話題提供: 森と水の源流館の取り組み .....	24
	体験報告: 川上村と森林環境教育	
	上牧町立上牧第二小学校 井上昇先生 .....	26
	王寺町立王寺小学校 川辺恵美子先生 .....	29
16:30	おわりに	

なおこの報告書は後日、音声記録から聴きお越したもののため、講師ならびに発表者に文責はありません。

## ごあいさつ

---

川上村長

財団法人 吉野川紀の川源流物語 理事長

大谷 一二

本日は残暑の厳しい中、しかも奈良県内外、さまざまな地域からお越しいただいているとのこと、本当にありがとうございます。主催者を代表しまして心から御礼申し上げます。

さて、奈良県川上村というところはどんなところかと一言で申し上げますと、「ダムが2つできた」という村です。「ダムで栄えた村はない」といわれるように、当初は、私たちもダムに対しては反対をしてまいりました。しかし私が就任いたしました当時、奈良県知事の奥田良三先生が、当時県民が70万人であった奈良県を「100万人都市にしようとするには、どうしても水が必要なんだ」ということをおっしゃられ、それから再々、話し合いを重ね、大迫ダム、大滝ダムをつくりたいので、協力せよということであったわけです。「ダムで栄えた村はない」と言われますが、私どもは「ダムができた後も、村を栄えさせようじゃないか」と思ったわけです。

昭和34年の伊勢湾台風では、川上村でも72名の方が亡くなり、そのうち、真っ先に救助にあたった消防団員も10名が殉職なされました。山の木々も風で倒れ、山崩れも起き、大きな被害を受けました。400箇所約4000ヘクタール、消えた流木が約8万石、3万立米近く、これだけの損失を川上村が受けました。崩壊した山の復旧や治山において、国や県の助成も補助をいただきました。しかし川上村村民自身の努力があったことも事実です。そのような被害を受けても立派に再建、立ち直っているのですから、川上村は、このダムができて、きっと栄える村になるであろうと、私も現在まで務めさせていただいているわけです。しかし未だ成果というものは、いまひとつ上がっていないように感じます。

そうすることで、本日は前先生のご指導もいただき、私どもは何とか村の再建、発展をさせなければならないと思います。村の発展の基礎は、やはり山であり、林業です。そしてきれいな水を豊かに流し続けなければ「水源地の村」としての誇りが無くなるということで一生懸命やっているところでございます。つまり環境問題、山づくり、そして水づくり、「きれいな水を流そう」と、現在進んでいるわけであります。

本日は、こうして大勢の方にご協力いただいていることは大変ありがたいことと思っています。私どももこれを契機にいっそう環境問題、森林問題、山づくりの問題に対しましても、頑張っただけでございまして、何卒これからも、みなさま方のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。私からのお礼とご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 第 部 基調講演

---

### 講師 前 登志夫 先生 プロフィール

大正15年奈良県吉野郡生まれ。詩人として出発したが歌人前川佐美雄に影響を受け作歌をはじめ。昭和43年「山繭の会」を主催、「ヤママユ」を創刊。歌集に「子午線の繭」「霊異記」「縄文紀」「樹下集」「青童子」「鳥獣蟲魚」「流轉」「鳥総立」などがある。

第12回遼空賞、第3回詩歌文学館賞、第4回斉藤茂吉短歌文学賞、第48回読売文学賞、第26回現代短歌大賞など受賞多数。エッセイ集に「吉野紀行」「森の時間」「吉野日記」などがある。平成17年日本芸術院賞文芸部門受賞、併せて恩賜賞受賞。同年日本芸術院会員に選任。

千年にわたる歌枕の地、吉野に生まれ棲み、歌をよみ続ける。川上小学校・中学校をはじめ、地域の魅力をよみこんだ校歌も多数作詞。

#### 【司会】

本日ご講演いただきます前登志夫先生は、大正15年奈良県吉野郡、現在の下市町にお生まれになり、この吉野の地を拠点とされ、長きにわたり、数々の歌や随筆を発表されてこられました。作品等につきましては、ほんの一部をお手元の資料にもご紹介しておりますので、そちらをご覧ください。平成17年に日本芸術院賞文芸部門受賞、併せて恩賜賞受賞され、この年日本芸術院会員に選任されました。先生には川上小学校・中学校の校歌も作詞いただきました、これは後ほど第 部の最初にもご紹介いたしますので、楽しみにお待ちしております。

吉野の山里に住み、鋭く、やさしく山里を感じ、それを言葉で表現される先生には、今回のシンポジウムのテーマに、もっともふさわしいお話をいただけるものと、ご多忙の中、無理をお聞きいただき、本日ここに実現するに至りました。

では、前先生よろしく願いいいたします。

【前 登志夫 先生】



ただいまご紹介いただきました前でございます。大谷村長さんの大変気迫のこもったお話を聞きまして、いつもですけど励まされます。それから多少買被っていただいて、私にとって川上村というのは、何か格式のある、古い伝統を持った気骨のある村で、俗に言えば敷居が高い感じがございましてね、何一つ川上村に貢献できる力も業績もございませんが、たまたまこの源流館の、いま司会をされている尾上さんあたり

りが、私のものをよく読んでくれていましてね、そういった縁（えにし）というものも、大変うれしいことでありまして、まあ川上村のみならず奈良県のいろいろな風土というものを大切に考えておりますが、そこで得手な領域に関して話があるということは、私のような人生を送ってきたものにとっては、うれしいと思いますね。

**豊かな水に対する敬いが生きた文化であると思います。**

何年昔でしょうか、越智野のあたりを歩いておりました、車木の斉明天皇陵から、私の仲間といっしょに、当時はまだこういう万葉ハイキングなどというような道が十分に整備されていない戦後の厳しい時代と、ようやく底を越えた時代の昭和40年代くらいだったでしょうか、その頃、私は角川文庫で『吉野紀行』というものを出版しておりますが、そのとき、車木から与楽あたりを過ぎて、明日香へ出てくる田んぼの道を、畦を潰してはいけませんし、そういうところを探し歩いて、いろんなコースを私なりに良い道を見ついたり、発見といえば大げさですけどね、そういうことをやっておりました。そんな時に、あるおばあさん、今から思うと私よりはずいぶん若かったに違いないのですが、お孫さんの女の子と重箱を持ちましてね、「どっちへ行かれるんですか？」と聞くと、「むこう集落まで行きます。今日は野遊びです。」というね、非常に古い、既にもうわれわれの現代では滅びてしまったような、暮らしの中に根づいた言葉をおっしゃって、大変感動したことがありますね。

その時の集落のところをはっきりとは覚えていないのですが、この吉野川で下市口の千石橋の下から、どういう管の造りになっているのか、私はそういうところは詳しくないのですが、大和の平野部へ水をとっている、そういうのがようやく行われた時でありました。これについては私、多少の高ぶりがありまして、NHKのテレビの番組にちょいちょい出たりしておりましたが、天武・持統というのは、一番古代の白鳳の時代をつくった大きな人ですけど、その持統女帝があれだけ厳しい時代に、10年間で31回も吉野へ来ている、その一番のテーマは吉野の山であると同時に、吉野の清らかな水だと思いますね。この水

は生命の蘇り、「おち水」といいますかね、漢字で書くと変化の「変」に若返る水、これが女帝でありシャーマンであった当時の天子にとって、霊力を持つには大変大事な要素であったのだと思いますけれど、あれほど古代人があこがれた吉野の水が、いま 1300 年を経て、ようやく大和国原に注がれるということに対して、私の感傷といえば感傷に過ぎないでしょうけれど、古典万葉の歌をとおした一つの高ぶりがありました。それが心の中にあって、雑誌などにもそのことを書いた記憶があります。そんな時、とある街角に、街角っていつでも村のあるところで、スギの板に墨痕淋漓というのはありふれた形容ですが、毛筆です。ボールペンやサインペンという品なきものではなくして毛筆で、「みよしのの きよられき水 おくられて やまとくにはら いまよみがえる」という 31 文字が書かれていました。私はたいへん感動をいたしました。別に巧い歌でもありませんし、その時「おくられて」ではなしに、「みよしのの きよらかなみず たまはりて」くらいに添削してあげたいなんて、勝手に思っておりましたけれど。なんて言うのか、水、豊かなる水なんですけれども、それに対する敬いというか、それが生きた文化であるということを思いまして、それも現実に誰かに言われて「ここに書け」とかいうのではなくて、なんでもない田舎の一農村の隅っこに、それが書かれていて、水音がしておりましてね、それはたいへん私にとって、よろこびでしたね。



歴史の心、文化の深さというものがある。

それは意外と、そこに住んでいるものにはわかりにくいものです。

いっぽうでは、そこは確か人麻呂が川島皇子が亡くなった時か何かの名歌中の名歌がありまして、「しきたえの 袖かへし君」、「袖かへし君」というのは伴寝をするということなのですが、俗に言えばね。もうひとつ枕詞がはいりまして、「しきたえの 袖かへし君 玉垂(たまだれ)の 越智野過ぎ行く またも逢はめやも」もう二度と逢うことはできないんだな、そこに葬られていく、それを人麻呂は最高のレトリックをもって歌っております。その土地の地霊といいますが、地の霊というか、その土地土地にある歴史の深さでありますね。おそらく大和が豊かであるというのは、高層ビルがあって栄えるというふうなことではないだろうと思います。そういのはひとつの文明の虚像のようなものですけど、そうでなくして深い歴史の一朝一夕にはいかない文化を持っているということですね。吉野の自然が信州やその他に比べて、そんなに優れているとは、私はお国自慢でそういう発想は持たないんですけど、第一に吉野の山や川という、水ひとつ、樹木ひとつ、その谷川のせせらぎ、そういうものでさえも、他の土地にはない、特に近畿やその他も好きではありますが、そこにはもっと植物的な、山が高い、雪渓が真夏でも残っていると、そういう素晴らしさがありますけれども、吉野の場合は、六甲などにはないものが、一木一草の中にですね、何かがあるということです。何かというのは何だと言われると困りますけれども、簡単に言えば歴史の心、文化の深さというものがある。それは意外と、そこに住んでいるものにはわかりにくいものなんですね。それは他所に旅に行ったり、いろんな土地を訪れて、そして優れた他郷の人たちの意見にふれたり、そうすることによって自分を育ててくれたもののかげえのなさというものを発見することが多いですね。私は下市の奥、丹生川上の下社の近くですね、そこから大峯山に行く天川へ入っていく、それから五條から十津川へ入っていく道があります。それからこの川上の一番格調が高いですね、丹生川上の上社の道でありますけれども、そういう、ここからがどこであるという小さなことではなくて、それらを全部ひっくるめたところに吉野というかけがえのない風土の命があるということを思いますね。

懐かしい風物詩というものはなくなりました。そういう職業がね。

つい昨日でしたかね、筏のことを書いていたんですけど、筏は今ではもうなくなってしまいましたが、私は今でも、時として筏の歌をつくったりします。NHKが出版している『NHK短歌』という月刊誌に連載しているものに、夜の筏に乗ったことを書いています。もちろん夢のことです、夜は筏は無理です。筏というのは外から見ていると非常に優雅ですけど、以前これもNHKの放送で、五條の青年会議所の人が発起してね、まだ材木の値打ちのある昭和40年ころですね、ヒノキのよい柱ばかりで筏をつくって流しました。音無

川の上流から流ってきて、栄山寺の前でアナウンサーと待っておりまして、「ここに付けますから、気をつけて飛び乗ってください」と、「そこでアナウンサーが何かを言いますから、質問したり、会話をしてください」というので、朝早くから待っていたんですけど、なかなかなんですよ、お昼をよばれて、もう来るかなと待っていたら、やっと今、筏が下りてきますというので、今か今かと待っていましたら、その筏が非常に平坦なところですので、何かこう、うまくいかないんですね、途中で切れまして、それを修理するまで筏は下りてきませんので、しばらく待ってくださいというので、それから夕方まで待ちました。おかげで、夕方の風景がよろしかったですけれどね。それほど難しいものですが、川上村の出身の方などで、私よりも古い方は、そういう体験もあるかと思います。筏なども見ておりましたら非常に優雅に見えるんですけども、栄山寺のような平坦なところでも、ちょっとした筏を流すのに一日がかりでやっていましたね。結局私たちが待っているところにやってきたのは、午後 5 時ごろでした。そしてそれで、どうしてもこちらに、よう寄せなくてね、向こうのほうの流れのところで、マイクをつけていたので、「もっと寄せ」とかいう、みんなの声が雑音になってみな入って、ワイワイ言いながら、行くものでした。それにダブらせて私が詩をつくりましてね、それをアナウンサーに読んでもらいました。独特な夕日の筏という感じでしたけれども、このように実際にやって、そこでその土地の産物を守り、育て、技を磨いていくということは大変ですね。私の夢の中に、(私の住まいは) 100 年前の山小屋のようなところで、昼は寝ていますけれど、昼寝していて汗がにじむというようなことは、(今年が) はじめてですね。歳もいったせいもありますけれど、夜は涼しいから、夜は仕事を、書き物をしておりますけど、それにうなされたのでしょうかね。夜の筏に乗ってね、七夕の晩でしたね、七夕というのは今年は 8 月 18 日でした、旧暦の七夕です。筏が流れているんです。すごくきれいな川でしたね。落ち鮎がいっぱいましてね。それを私は竿網ですくいましてね、生で食えないので、コンロが欲しいなとキョロキョロしていたんですが、コンロなんてありませんし、でもこれはあくまでも夢の話でありまして、筏というのは大変ですね。

私、昔昭和 2 3 年、4 年、5 年、まだ本格的に放浪する前です。吉野山水という旅館がありまして、下市の千石橋の下に、東屋が三棟ありまして、そのじいさんに「今はこんな時代だから鮎を出すこともないから、空いているからそこを使いなはれ」と言っていたので、そこにいたことがありますね。二十何歳の何も知らない鼻たれの、夏目漱石か谷崎潤一郎になったような顔をしてね。そこで夢見たいな寝言みたいなのを書いておりましてね、書くのが嫌になったらお酒を飲んだり、うたた寝をしたりしておりまして、夜明けになりますとね、深い川霧の中を川上のほうから、ちょうど貯木のあたりで朝、繫留してあるのをもういっぺん出発するのでしょうか、あの千石橋の下は大瀬といって、かつての宮滝のように激湍でした。しかも曲がっておりますので、一番先頭にいる筏師さんというのは、筏師さんといえば、吉野の昔の紙すき歌が国栖にありますけど、その紙すき歌で一番の花形は筏師さんなんです。かっこよかったんでしょうね。和歌山まで行ったら女の



がチャホヤしてくれて、少々お金をもらっても、おおかた使って帰ったんじゃないかと思いますが、それもまた吉野のよさですね。そんなことを言ったらしかられるかもしれませんが、その筏を使う人を私はじっと眼下に見ておりましたら、ものすごい勢いで筏がザーっと、そして岩壁にあたるところで、長い竿を出して、その岩壁を突くんです。そして筏がそこへぶち当たるのを避けます。長いのは40m以上もあるものもありますから、次の人も深くまた突いてね。横に当たりますと、私がテレビのときの青年会議所の人たちがやっていたように、バラバラになりますから、それを見ておきますとやっぱり、すごいですねえ、その水しぶきなんかで、私も文学なんてやるよりもね、訳のわからない詩なんか書くよりも、「筏師になりたいなあ」なんて本当に思いましたけれども。ならなくてよかったですね。じきに昭和30年から、みな貨車で運ぶようになったし、それから道がよくなってトラックで運ぶようになりましてからね。ですから懐かしい風物詩というものはなくなりました。そういう職業がね。



昭和40年頃からか、もう少し経ってからか、「みなかみに 筏を組めよ ましらども」、「ましら」というのは猿です。自分の一番先祖ですね。「みなかみに 筏を組めよ ましらども 藤蔓をもて故郷をくくれ」難しいですね。なんていう歌があります。もっと若いときは「つやびきて 冬の筏はながれゆく 望郷のうた ふたたびあるな」ふるさとを思う思いというのは、一番根底になるものなんですけれど、それにうち勝たなければいけないという若い日の思いがありましたが、そういう望郷の情緒に甘えていたらいけないという思いでしょうね。でも「藤蔓で故郷をくくれ」というのは、ややこしいですね。故郷というのは一番大事なものですけれど、いろいろな人間のしがらみやらが、いっぱいあります。そういうものを全部流してしまおう、ふるさとという得体の知れぬ、魑魅魍魎の棲む、もののけと対峙しなければだめだという壮年期の思いでありました。しかし今頃になって老いさらばえてきまして、夜の筏に乗るようになったら、もうこれ、菩薩にだいぶ近いですな。夜の筏になったら、ぶち当たっていても、何をしても、それは無理ですけど。もうこうなったら霊力で筏が流れていくのかなと思いますけれども。

小さな川、吉野川本流の場合は別ですが、上流のところに筏場なんて地名がありますが、若い頃には、そこに行って、そこに吹き降ろしてくる風、秋の夕方頃の半端なものではな

かったですね。一人だと気持ちが悪かったですね。

丹生川という支流があります。五條の靈安寺から入る黒滝川なんかになりますと、黒滝村あたりの古文書には、筏を流すために水量が小さいから井堰をつくるんです。そして水をためて、大雨の降ったときに、バンと抜いて、鉄砲水というやつですね、それで流したんです。そうなりますと沿線のところに氾濫しますから、それで訴え出て、五條の裁判所の訴訟の文書などもありますね。百姓の人も一生懸命つくっているのに大水が出たりしたら大変ですから。山で生きる人と、その沿線で農業をやる人、あるいは紙すきをやる人によって、利害が違ったりね。そういうのでいろいろ話し合ったり、争ったりして、そして土地の産業をなんとか折り合って、つくってきたのでしょね。そういうのを調べていると、歴史の表面には現れていないんですけど、なにか涙ぐましいものがありますね。しかし私にとっては夢の中の筏です。それを見るようになったら注意しないとあきませんな。筏から落ちててもわからないようになってはダメです。

もともと川の上流に対する思いというのは、

日本人の古い感性の中にあるんですよ。

海辺に住んでいる人は「よりもの」と言いましてね、嵐のあとなどは、泳げないものまで流れてくるんですね、みんな海辺に出るんです。これは人間の能力を超えた、神からの授かりものという考え方がありますね。高いところの国からやってくるという。昔の時代の流れよるものもっている雅なものとかが少ないのが残念ですね。しかし一番古くはなんでしょうね、ひとつは桃でしょうね、どんぶらこっこ、どんぶらこっこと流れてくるね。その桃を持って帰ったら桃太郎が生まれたということで、桃というのはありがたいですね。非常にシンボリックな象徴的なものですね。日本人は、そういう細やかな、規模は小さくても、山があり、谷があり、そこに集落があり、人の暮らしがあり、神々や獣や人間がそこで暮らしていく。そういう細やかな味わいがありますね。桃なんかはその象徴でしょう。あるいは瓜なんかもそうですね。瓜子姫という、それも桃太郎といっしょでね、超人的な靈気を神から授けられた大きな力を持っております。箸もそうですね。島根県の斐の川の上流の鳥髪というところへ、高天原から追放されたスサノオがやってきたとき、こんな山深い上流に人が住んでいるんだなあと思って、尋ねていくと、娘が8人いたけれど一人ずつ化け物の喰われてしまって、もうこの子一人しか残っていないとあって、ご両親が泣いている。それで見捨てておけないというので、私がそれと闘ってやろうとあってスサノオが闘うわけですが、この神話はあまりにも名高うございますね。いずれにしても桃といい、瓜もそうですね、箸もね、箸なんていうのはなんでしょうかね、最近では木材の資源が安いのに無くなるということで、なるべく給食などでも割り箸を使わないように、塗り箸にするようにと、なっておりますのは、私は塗った良いお箸をいろいろもらいますが、やはり割り箸がすきですね。それで叱られても、私が食べることに使うくらいはし

れてますから、吉野のスギの柱目のパンと割れるやつがね、香りもよいし、重さもよいですから、それを使わせてもらっています。箸というのはなんでしょう、霊力のあるものです。人間がものを食べるというのは、非常に罪深いことです。命あるものをみんな「はい、いただきます」「ごちそうさま」といってね。

そういえば水を流すのだって、このあいだ、私の仲間の人の歌で関心したのが、この人マンションの13階に住んでおられるんですが、朝夕水を流すと、その下にはみんな自分と同じように人が生きている、その人たちに申し訳ないなという、ひとつの許しの思いというか、そういうものがあるのが本来の日本人の感性だと思いますけどね、日本人が日本人でなくなって、みな宇宙人になって偉くなりすぎるのか、全部、権力や権威というものになっていって、日本人が本来もっている優しさのような感覚をだんだん失っていくように思われますね。しょうがないといえばしょうがないですけどね、そういう心持ちを持つかどうかによってずいぶん違うでしょうね。どんなことでもみんな今は、文句をつけるということが美德というか、知恵であるようになりましたね。クレームをつけるクレイマーという、嫌な感じがしますね。その点、これから生きていく若い人は気の毒のように思えてしかたありませんね。

水は深くたたえられた中にも優しさがあるのではないか、  
流れてしまうだけではなくして、

かつて川上村の中学校が合併になって、そして校歌を頼まれて参りましたが、もう言葉としては私の憧れの吉野川の岩砕く清流を歌いたいと思っていたのですが、簡単には歌えないけれども、清流を歌いたいと思って、校舎に参りました。当時の校長先生が、「あの白屋岳の向こうからは金鷲が飛んで来て、神々しく眺めたものだ」ということを聞きました。その話はよかったですね。その時にはダムができておりまして、それで私のしらべが全てとまってしまうんですね、「川上の岩うつ波の」なんて、決まった文句があったのですが、それが出てこないんですよ。それでどうにも行き詰って作れないから、校長先生からお叱りがありまして、卒業生がもうじき卒業するから、練習をする間もありません。早く作ってくださいということで。朝日新聞にコラムがありまして、そこに3回ほど執筆しましたが、その時にダムができて校歌で難儀しているということを書いた覚えがあります。そこで考えまして、水は深くたたえられた中にも優しさがあるのではないか、流れてしまうだけではなくして、しかもその水が大和国原に送られて「みよしのの きよらけき水 たまはりて やまとくにはら いまよみがえる」という名もなき一生活者の百姓の古遺産でしょうけれど、ちゃんと崩れずに、それを書いて感謝の気持ちを31文字に書いて、それを自分の家の前の田んぼのところに書いてある。ああいいなあと思いましたね。日本はまだ滅びないなあ、私ら戦中派世代にとっては、戦後は滅びたのも同じではないかという思いもありましたけれど、日本はいいものを持っているんだと。

木を育てて、木とともに生きる、それを凄いとしますね。

何かそこには長い時間というものがありますね。

私の職業は樵と言っているんですよ。樵というと中には「そんな職業今ではないでしょう、山林労務者だったらいいけれど」、中には学者が樵というのは差別語だということで、なぜ差別語なのか、逆差別で私は樵というのは、大変威張って言っているんだと言っていましたね。そんな笑い話のようなことがあるんですけど、そういえば、樵というのは今の職種の中ではだんだんなくなってしまふ、筏師というのもなくなってしまいましたけれど、樵というものの尊厳というか、木を育てて生きる、山に生きるものの、その凄烈な生き方というものをもっと残したいなと思いました。私はそういつてもね、えらい大きな木を伐っているように歌壇で思っているんですけど、昭和30年頃、今から50年前に「丁々と 樹を伐る昼に たかぶりて 森にかへれる 木霊のひとつ」なんていうのがね、いいほうに解釈されたから、私はすごい人だな、あの吉野の山で斧を振ってね、そして大きな木を伐っているように思われているんですが、嘘もはなはだしいので、私はこれ（手で輪をつくってみせて）より太い木は一本も伐ったことはございません、言葉で伐っておるだけですという、訂正を近年しておりますけれども、木を育てて、木とともに生きる、それを凄いとしますね。私はその端くれに過ぎませんけれども、何かそこには長い時間というものがございますね。

自然のものは永劫の時間をみております。

われわれは、そのかたはらをほんのしばらくの間だけ、

ふっと通り過ぎるだけなんです。

ポツダム宣言のときの日本をやっつけたアメリカやイギリス、フランスの連中がですね、それにしても日本のような芸術的な素晴らしい民族が滅びてしまうというのは、残念だなあと言ったそうではありますが、それは真実だと思いますね。それだけ、割合に荒らされなかったから、よいものを大事に持ち続けていけたということがあるでしょうね。司馬遼太郎さんによると、朝鮮半島などは550回、モンゴル等の外敵に侵されているんですが、古きよきものを大事にしていこうと思っても、そうはいきませんよね。気の毒といえば気の毒です。そういう点では、日本の場合、たまたま台風が来てくれたり幸運もあって、それで古きよきものがいい意味で持続されました。私などから見ると、この50年というのは、古きものというのは、みな悪いものだ。中国の4人組は悪いやつでしたとか、そういうようにみないっしょごたにされてしまいますが、そうではないと思いますね。そういうところがわかってもらえる。山道を歩いて、樹木の持っている千年や二千年ではないですね、もっと古くからの時間というものが、たゆみなく生きてそこに出ている。われわれはそこを、それらのものが過ぎ去って行って、そこにいるように錯覚をしておりますが、

そうじゃないですね。自然のものは永劫の時間をみております。春にはまた、そこには実ができて、あるいは岩をうつ水が落ちたりします。そのかたはらをわれわれは、ほんのしばらくの間だけ、そこをふっと通り過ぎるだけなんです。そこが見えないんですね、見えないから自分は今もう、地球を手のひらの上に乗せたような、世界中みんなわかったような気持ちでありますね。それはひとつ非常に怖いことだと思いますね。苦しいことやいろいろなことがありますけど、我慢することはそんなに簡単なことではありません。

山深いところには、ひとつの魔性があります。魔物が棲んでいます。と同時に永遠に妣（はは）なるものがあります。伯母峰の一本たたらは有名です。最終的には一つ目、一本足の怪物をつくっているんですが、本来は上木のたたらのごとくでしょうね、砂鉄、水銀そういうものでつくるといって住んだところであると思いますが、同時に姥ということでもあります。それは優れた男の子を生み出す母体であります。そういうのも姥であります、そういうことを一つずつやってまいりますと、川上などはまだまだ宝庫になるところですね。南北朝のようなことで、そこで行き詰まるんですが、それも大事です。



吉野という風土は、人界を超越している心が根源にありますね。

吉野に対する一番憧れの人というのは、万葉集の大海人皇子、天武天皇の歌です。「みよしのの 耳我(みみが)の峯に 時なくぞ 雪はふりける 間(ま)なくぞ 雨はふりける その雪の 時なきがごと その雨の 間なきがごと 隈(くま)もおちず 思ひつつぞ来る その山道を」長歌ですね、これはちょっと民謡的なしらべのうえにのっておりますが、その一番のモチーフはいつでも雪が降っていて、いつでも雨が降っている、この形容の中には、そこが聖地であるという思いが大変強いんですね。そこを訪ねて行って、私はやってきたのか。人間というのは生命が衰えてくるにつれて、そうやってきたのは、当時の時代の大変な日本の、半島との関係、その他の、一国の支配者としての大海人皇子の思いだと思ったのですがね、この頃はね、折口信夫とかは、恋歌というように見えていますね。私もそれでいいのではないかと思いますね。こういう恋歌が歌えたとは大変素晴らしいことだと思います。ただ「耳我の峰」というのが、吉野のどこかわからないですね。龍門岳のあたりを想定したり、奥千本の青根ヶ峰のあたりを想定したり、あるいは山上ヶ岳を想定したり、学者によって違いますけれど、いずれにしても吉野という風土は、人界を超越している、人間の独界を超えた、そういう心だというのが根源にありますね。それは非常に大事なことだと思います。そういうものの中で、丹生とか、いろんなところがありますね。丹生三社

がありますけれど、川上村の丹生については、もう少し多くを学んでおけばよかったと後悔することも多いですね。白屋岳には何度も行きましたが、今、ちょっと忘れましたが、白屋岳に4月20日に登ったら、頂上には雪がありましてね、雪を掘るとその中に、秋にチョコレート色の実のなるあれが、そのまま雪の中で冬の間ずっと守られていましたね、感動しました。そんなことを言えば、白屋岳のみならず、高見あるいは吉野の各地には素晴らしい山々がありますね。天武さんだけではなくして、大和から峠を越えて吉野に入りますと、その思いになりますでしょうね。平野を悪くいうのではないですけど、そこは俗界を越えた世界ですね。

## 水というものは、われわれ人間の記憶の深いところにある

もっとも大事なものを豊かに見せてくれる。

西行という人は、吉野に大変あこがれましたが、「花の色の雪のみ山にかよへばや」といって、桜の花の色も晩年の『聞書集』のあたりでは、釈迦が見いべくした、その説弁、そこに通っているんだという、もっと宗教的な高いところまであこがれておられましたけれども、万葉人の場合は、もっと現実的です。吉野川でいうと、味稻（うましね）という人などは、非常に幸せでして、桑の枝などが流れてきたから、それを拾うと、絶世の美女に変身したということが万葉集の末巻の中にあります。そのように川というのは、桃を流してきたり、瓜を流してきたり、それはわかりやすい事例であります。もっとも大事なわれわれ人間の記憶の深いところにあるものを豊かに見せてくれる。水というのは、私はいつもなにか思いが屈したときは、方丈記の冒頭の「ゆく川の 流れはたえずして しかもほんとの水にあらず」という宇宙観の極致のような、水が流れ流れて、本当の水ではないと。やっぱり流れるときは流れないといけませんね、あんまり残っていると。それが今は適度に貯められて、しかも大和平野の飲み水である、あるいは農業の水として、この頃



は天理からずっと、ずいぶん北のほうまで、その水が送られているは、大変ありがたいことだと思います。

山には、われわれの日常の時間をはるかに越えたものが息づいている。  
そういう命を養ってくれている土壤があると思いますね。  
山に入って、そのよさを感じてもらった人でないと、  
わかってくれないですね。

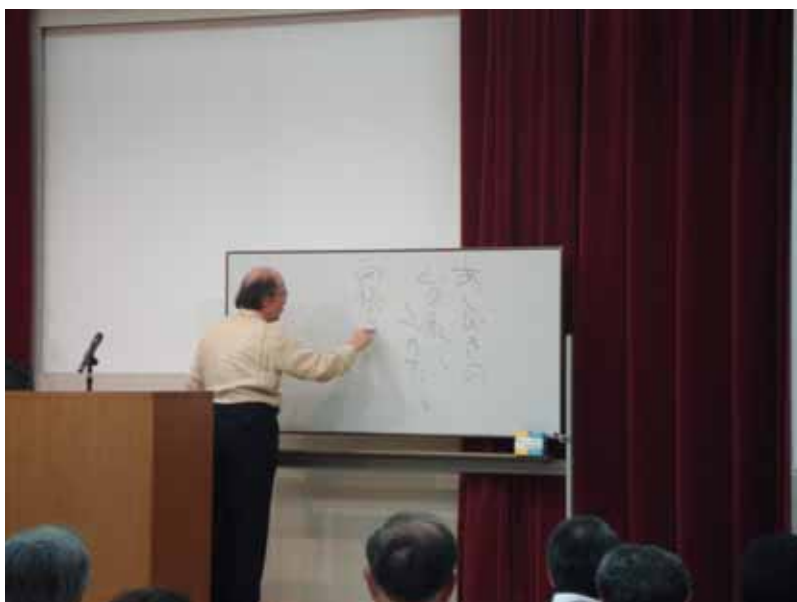
私の歌で（板書）

「あしびきの 山の泉に しづめたる 白桃（しらもも）を守（も）れば 人遠みかも」  
第二歌集の『霊異記』に入ってます。

『日本霊異記』という、薬師寺の僧・景戒の書いた仏教説話の名著がありますが、私の二番目の歌集が『霊異記』で、三番目の歌集を『縄文紀』。同じ「き」でも、これにはこだわっておりまして、こちらは日記の記、古事記の記です。『縄文紀』の「き」は、『日本書紀』の紀です。これは40年ほど前です。昭和40年くらい。40年ほど前の白の桃はどうなってますかねえ。種だけになって流れてしまったか、どこかに新しい桃になっているのか、あるいは元気な桃太郎が生まれているのか、そこは知りませんが、そういう山には、われわれの日常の時間をはるかに越えたものが、息づいている、そういう命を養ってくれている土壤があると思いますね。それで、そこをわかってもらうということは、やはり山に入って、そのよさを感じてもらった人でないと、わかってくれないですね。わかれと言っても大変ですね。私のところへ学生などがアルバイトに来て、霧がかかっている山をみて「おお東山魁夷の絵って、あれはリアリズムですな」と、あほなことを言って帰る子がいますけれど。つまり都会にいて東山魁夷の絵をみて、もちろんそこには月があったり、花が咲いたりしておりますけれど、やはり山の霊気というものがわからないから、これは香りとか、肌にくる気、今グラビアなどは大変よくっておりますので、わかったように思うのですが、決定的に映像と、それから実際に自分でそこを歩いて、山から伝わってくる質感、一番は、そこに倒れるのがいいですね。座るのが。この間、三輪山に登りまして、あつという間に登って、狭井神社の神官さんが「あつという間に下りてきましたね」って、ついこの間までは、そうだったんですよ。ところが今は300mが800m、1000mに感じられてね、大変でね、ちょっと行けば、そこに座りますけれど。一番いいのは、あまり無理をしないで、そこで身体を任せることですね。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の中に出てくるジョバンニがお母さんの牛乳を取りに行き、車を待っていると、車に乗って、宇宙を走る車になって、それが水死した友達といっしょの旅になるのですが、そのときにその異次元に飛躍する瞬間、大地に自分の身を投げ出す瞬間、はじめて宇宙と合体するところがありますね。私は寝転ぶのが大好きです。ただ今年の夏は寝転んでいたら、汗でびしょりになって、早く涼しくなってほしいですね。山に仕事に行き、私ができるのはせいぜい、紐打ちという作業ですが、その間に、水が出ているところに、トマトでも瓜でもいいのですが、白桃でも入れておけば、ぽこぽこ浮いてますよね、それを見ているだけで楽しくなりますね。コウヤマキやヒノキの林、スギになるともっと違いますね。そ

れがずっと積み重なったところは、適度な湿り気があって、そこで眠れるようになったらいいですね。私などいったらヤマアリが気になってあきませんね、気にしなければアリも木の幹や株だと思って通り過ぎてくれるんですね、そこまでいけば私は樵だと威張れるんですけどね、もうダメですが。これからあとわずかな人生の間にね、もう変なことを書いたりするのも飽きてきましたから、それが私の宿命なのかも知れませんが、できればもうひとつの樵の本業をですね、生きてみたいというのが私の憧れです。そういうところに川上があり、あるいは天川がある、ということは大変うれしいと思います。

最後に、あしびきの 山の泉に しづめたる 白桃は、今どこにあるかということを考えておまして、その後から何か、新しい歌が生まれてくるのだと思いますけれど、わかりませが、楽しみにしておいてください。



【司会】

前先生ありがとうございました。いろいろなエピソードや歌をとおしてお話いただきながら、吉野の文化というのは、決して派手ではないけれども、一木一草に見出すものや、水への尊い思いの中に生まれてきたものだということと、永劫の積み重ねの中の、ほんのわずかな隙間である現在に、われわれは生きさせてもらっているというお話が印象的でした。おそらくみなさんも、もっともっと先生のお話を聞いていたいとお思いとは存じますが、後の予定がございますので、ここで基調講演を終えたいと思います。ひきつづき先生には、第 部でもごいっしょいただけるとお聞きしております。第 部では前先生に作詞をいただきました川上小学校の校歌もご紹介いたします。



## 第 部「かわかみの<sup>も</sup>り森林は、みんなの先生」

---

【司会】

第 部のはじめに、基調講演をいただきました前登志夫先生が作詞をされました川上小学校の校歌を川上村の豊かな自然の映像を見ながら、お聴きください。

### 川上小学校 校歌

作詞 前 登志夫 作曲 西浦 達雄

一 みよしのの

吉野の川の 川上は  
大昔から 人が住んでた  
川しもへ 世界へ  
光を 流したのさ  
明るく 笑い 手をとりあって  
さあ 森のかおりと 友情を  
おくろうよ ここから

三 みよしのの

吉野の川の 川上は  
大昔から 山が生きてた  
川しもへ 世界へ  
心を配ったのさ  
こどもら みんな 元気に遊び  
さあ 森のいのちと 歌声を  
おくろうよ ここから

二 みよしのの

吉野の川の川上は  
大昔から 水が澄んでた  
川しもへ 世界へ  
力を与えたのさ  
しっかり 学び よく 考えて  
さあ 森のふかさと ひらめきを  
おくろうよ ここから



(スライドショー)

【司会】

いかがでしたでしょうか。

川上村には現在、小学校は1校で全校児童51名です。このように、川上村は過疎化の進む、小さな村ですが、とても豊かな自然に触れながら村人は暮らし、またその自然や歴史物語に誘われ、多くの人々が訪れます。

自然、山、森、水、それらに人々は惹かれます。では、「人は、山や森から何を学ぶのか」、ここからはそれを考えていく時間としたいと思います。

はじめに森と水の源流館の辻谷達雄 館長をご紹介します。

辻谷館長は川上村に生まれ、育ち、林業をとおして、50年以上もの間、山とともに生きて参りました。さまざまに山から学ぶことがあったと思います。

そんなエピソードを交えて、少しお話いたします。

【辻谷 達雄 館長】



ただいま紹介をいただきました森と水の源流館の館長、辻谷です。どうぞよろしくお願いいたします。みなさま方には公私ともご多用のところ、また連日の猛暑の中をこのように大勢の方にお集まりいただき、厚く御礼を申し上げます。

私は川上村の柏木というところで、1933年に生を受けまして、それから70年あまり、川上村の自然に守られ、生かされてまいりました。地元の学校を卒業するやいなや、15歳から山の仕事にかかわって、半世紀あまり林業を生業として生きてまいりました。従いまして今日までの私の人生すべてが、山であり、森であります。ということで私にとって山は学校であり、山の木は先生であります。また私にとって山は病院でもあり、木はお医者さんでもあります。山は何ごともしっかりとつんでくれる大きな母の懐でもあると思っています。今日までの70年の山での生活をふり返って、いろいろ体験してきたことや、感じていること、また私の思いなどを少々、話させていただきたいと思います。

自然の中で遊びを通じて、

今で言いますところの「生きる力」が養われたと思います。

私の子どもの頃は、遊び場はほとんど山でした、夏はもちろん川でしたが、それ以外の季節はほとんど山でした。ということで、山が遊び場で、当時はたくさん子どももおりましたので、村の各集落のガキ大将のもとに、学校が終わると集まったんです。そのいろいろな遊びを先輩から教わりました。その中でいろいろ知恵や技が身についてきました。た

例えば山でどんなものが食べられるか、毒性のものを見分け方、刃物を使って山の材料で遊び道具をつくったんです。今は何でもお金を出せば求められますけれど、当時は何にもおもちゃがなかったんです。で、竹とんぼを作ったり、笛を作ったり、水鉄砲を作ったりと、自分で遊ぶ道具は自分で作ったんです。ご存知の方も多いでしょうが、当時、肥後守（ひごのかみ）という10cmほどの切り出しナイフで、これは兵庫県の三木市で造られたものですが、当時は男の子はみなこれを腰からぶら下げておったんです。家でも学校でも持っていたんです。学校では鉛筆を削ったんです、そんな中で切り傷が絶えなかったです。当時のみんなはナイフの怖さや、切った痛さはよく知っていました。よく殴りあいの喧嘩をしましたが、刃物で人を切ったり、刺したりする子どもはいませんでした。刃物の怖さを知っていたんですね。また山で遊びのときに手を切ったら、血止めを何でするかというのも覚えたんです。ヨモギとかヘクソカズラとか、それを揉んでつけると血が止まった。また腹痛を起こしますとセンブリとか、キハダをかじらされたんです。これはものすごい苦いんですけど、よく効いたんです。そうやって薬までも遊びを通じて、自然に身につけていったんです。それが今で言いますところの「生きる力」を養われたと思います。

最近小学校では、総合的な学習という、いわゆる時間割の中で生きる力を養うという勉強をされていますけれど、私の子どもの時代には、お話ししたとおり、山の遊び場で身体で覚えてきたんです。そのことが70年あまり経った今でもけっこう役に立っています。なかなか忘れません。

古木や巨樹の前に立ちますと、

神の存在を感じて畏敬の念を抱くときがあります。

山も当時と様変わりしています。当時は里山林が家の近くにあったんです。ところが戦後の国策もありまして、人工林が奨励された時代だったんです。家の近くまで今でもスギやヒノキが覆いかぶるようなかっこうの山になっていますね。経済林とかいって当時奨励されて植林をされたんだと思います。そんなことでせつかくのクヌギやナラのあった里山がなくなってしまったんです。これは川上村だけでなく、近隣の黒滝村や天川村や東吉野村などの林業で栄えた村は同じような状態になっていると思います。里山が残っていた時代には、夏の夜、電気の灯りを目掛けて、カブトムシやクワガタが飛び込んできて、けっこう楽しめたんです。ところがいま、スギやヒノキに変わってしまって、カブトムシやクワガタが好むクヌギやナラがなくなったんです。なんか子どもや孫たちへの楽しみを奪ってしまったような気がして、ちょっと肩身の狭い思いをしています。そして経済林といわれて造ったんですが、現在は木材市場の低迷で経済林の役割も果たせないままになっております。今思ってもしかたないんですが、あの里山林を無くしたことに悔いを残しております。

大昔から山とどうつきあってきたかといいますと、ひとつは山というのは自然崇拜の念

があって、山には神さんがいると考えられてきたんです。山の中に信仰の場が今でもたくさん残っています。自然信仰の神社や仏閣があるというのが象徴的なんです。桜井市の三輪大社は山全体がご神体として祭られています。自然信仰で有名なところと申しますと、比叡山とか高野山、遠いところでは羽黒山、近くでは大峰山などがあります。ところが私が一番身近に感じたところは山の神さんなんです。人々は山には神さんがいると存在を認めて、山は聖なるところ、きれいなところだと崇拝をしてきたのだと思いますね。今でも山とかかわって生活をされている方は、やっぱり山をそういう目で見ていると思います。巨樹や巨木にしめ縄が見られますが、これも樹の霊が宿っておるといわれる、いわゆる太古以来の宗教的な感情が存在しておりまして、人々は大木の前に膝まづいたそうです。私も山に入っていますんで、時々、古木や巨樹にあたるんですが、その前に立ちますとなにかこう、神の存在を感じて畏敬の念を抱くときがあります。そんなことで私は今でも1月7日、6月7日、11月7日の年3回、山の神さんを祭りに行っています。

このように人と山が直接結びつくような態度というのは、日本人特有の自然観ではなかったかと思います。現在の自然というのは、昔のような崇拝の場ではなく、自然というのは、癒しの場としてみておられるように思います。それはいつの日か近代化によって生じた日本人の自然離れから起こったものだと思うのですが、文化とかの発達に自然と人間の間を徐々に遠ざけていったんです。言い換えますと、昔は自然と人は一体の存在であったんですね、みな山の中に住んでいましたから、ところが人が自然の上に立って、自然を支配しようと考えたのは間違いだったと思うんです、この大きな自然に逆らえば、必ずしっぺ返しがかかるということは、みなさんもわかっておいてほしいですが、現在の地球環境の悪化というのは、まさに私は自然のしっぺ返しだと思っております。

昔から、いろいろ生きる知恵とか技として身についたことが

今、自然観察会なんかで、役に立っておるということです。

私の70数年の山の生活の中で、ほんとうに山の恵みがあって生きられたなという時期が実はあったんです。それは戦後の食糧難時代ですね。私が6年生のときに終戦したのですが、昭和18年から24年くらいの間の話ですが、川上村というのは田んぼがありませんでして、米が一粒もとれない、ということで小さいときからスギやヒノキはよく知っていたんですが、米がなるといのはどなんんかといのは、わからなかったですね。たしか小学校3年生ぐらいのときですかね、学校の教科書でそれがわかったんです。当時は生活用品や食料は配給制だったんです。限られた数しか与えられませんでした。今と違ってお金はいくらあっても、物がなかったんです。そんな時代でしたので主食の米というのは、申し訳程度しか配給がなかったんです。その代わりに何をくれたかと言いますと、ムギとかサツマイモとかジャガイモとかトウモロコシが主食やったんです。それだけでは足りませ

んということ、われわれの家の畑はもちろんくまなく作ったんですが、それでも足りなくて、開墾といいまして、山を切り開いて耕して畑にしたんです。もちろんわれわれも作ったんですが、粟とか黍とか、そんなものを作って食べておったんです。当時、小学校の時分のおやつというのは、カヤの実かカボチャの種の炒ったものしかなかったんです。それではとても辛抱できませんので、学校から帰ったら鞆をほるやいなや山へ走っていったんです。それでイチゴとかアケビとかサルナシとかイヌガヤの実をとっておやつにしたんですね。イヌガヤの実というのは、去年採って食べてみたんですが、当時取り合いをして食べていたんですが、なんでこんな渋いもんを食べたんやろと思いましたね。それぐらい当時は食べるものがなかったということです。それから、そういう時代にわれわれ子どもを育ててくれた親は、大変苦労されたと思います。

当時学校は勉強は二の次、三の次で、生きていくというのが精一杯やったんです。毎日食べ物を求めて川とか山に毎日行ったんです。どんなものを食べたかというのは、あまりにも残酷過ぎて申し上げられませんが、当時は死活を左右するほど貴重なものばかりやったです。一部だけ紹介しますと、夏は川でウナギとかアマゴとかウグイとか、いろいろ魚を採って食べたんです。それが夏のタンパク源やったんですね。牛肉とか生の魚、刺身などありませんから。冬は何をタンパク源としたかといいますと、罾をかけて野ウサギとかサワガニを採りに行ったんです。春から夏にかけては、山菜がすべてでした。ワラビとかゼンマイとかイタドリとかフキとか、数え切れないほどの種類の山菜を採って食べたんですね。秋はもちろん木の実とかキノコ類を探しに行ったんです。それはあくまでも生きるための手立てであって、今思いますと当時、収穫というより自然からの略奪やったですね。自然との共生というのとは、ほど遠い、これはまあ何度も言いますが、生きるがための策でして、そんなことの中でいろいろ生きる知恵とか技が身につけていったようですね。今、自然観察会なんかでまちの人にそんな話をしたり、まだ指導をしたりすることは皮肉なこと、そんな昔のことが役に立っておるといことなんです。

百聞は一見にしかずという言葉のとおり、

山に入ることによって、いろいろことを山が教えてくれます。

山の恵みにはいろいろありますが、その一つに、目には見えませんが、医学的な効用があるということは信じています。いままで長い間、健康を維持してきたのも、山のおかげだと感謝をしています。今、森林セラピー、森林療法とか言われ、いろいろ森林浴の紹介がされていますし、専門の先生によれば、樹木から発散する成分が人間の健康にどういようように役立つかということをいろいろ研究されています。近く分析結果が出されるやに聞いております。

とにかく難しい理屈は抜きにしまして、どうぞみなさんも山をしっかりと歩いていただ

きたいと思います。特に次の世代をつくってくれる子どもたちをお願いをしたいことがあります。日本の国で今、多発している少年によるショッキングな事件、それは人の成長期に自然と接する機会が少なくなっているということだと私は思います。最近では田舎の子どもも、まちの子どももみなゲームをやっていますね。外へはなかなか遊びに出ませんので、生活体験や自然体験が著しく不足しておられると思われます。子どもたちの成長期に欠かせない、自然とのふれあいというのが無くなってきていますし、自然とのふれあいのない生活の結果、社会の中で生きるうえに必要なさまざまな体験を経験しないままに、子どもが成長を急がされているように思います。これは大人の責任だと思うのですけれど。子どもの非行問題も子ども自然体験の不足と深い関係があると常々思っております。今の子どもはもっと野外活動を通して、生きる力を養う必要があると思います。

百聞は一見にしかずという言葉のとおり、山に入ることによって、いろいろなことを山が教えてくれます。自分の五感でしっかりと子どもたちが覚えて欲しい。知識と知恵、これは同じように思いますけれど、違うと思いますね。今の子どもはいろいろな本を読んだり、勉強されて、知識というのは頭から溢れるほどあると思います。ところがその知識を応用する知恵が欠けていると思います。その知恵を出すことで、からだを動かし、またいろいろな技術が身についてくるんです。私はそれが本当の意味の生きる力だと思います。それを教えてくれるのが山です。山の中に入りますと電気も石油も機械も道具も、コンビニもありません。なにか起こっても自分一人の知恵と技術に頼るしかないのです。どんなことに遭遇してもそこにあるもので処理することのできる知恵と技術が生きる力だと思います。山に行っておねだりしても、何もありませんもん。そこは知恵を出すことだと思います。

## 人間が自然を壊さない、汚さない、そしてじっと見守ること。

子どもばかりでなく、大人も自然を征服しようというような考えは捨てていただいて、自然にいくら逆らっても、大きな自然に勝てるわけがないです。「自然を守ろう！」という看板をよく見かけますが、台風が来ても、地震が来ても、こんなちっぽけな人間が、こんな大きな自然を守れるわけがない。それは反対だと思っております。自然に守られてわれわれが生きているということです。それを勘違いしないように聞いていただきたいと思うのですけれど。人間が自然を守るということは、人間が自然を壊さない、汚さない、そしてじっと見守ることが、人間が自然を守る最大のことであり思っております。また私のこれまでの山への思いでありますし、また山に対する情熱でもあります。壊さず、汚さず、見守る、その3原則を忘れずに、これからも一生懸命がんばるつもりでありますので、どうかみなさまがたの応援をよろしく願いたしまして、私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

【司会】

前半に前先生からお話いただいた、吉野の自然や文化について、ただ今、森と水の源流館の辻谷館長より話がありました山での知恵や技などについて、少しでも未来を担う子どもたちに伝えるお手伝いをしたいと、われわれ森と水の源流館では取り組んでいます。その取り組みをスライドで紹介いたします。

- ・ 川上村は吉野川紀の川の最初の一滴が生まれるところ、源流の村です。
- ・ 昭和34年に伊勢湾台風が大きな被害を残し、これを機にいま大滝ダムが建設されています。
- ・ この川の水は、和歌山市から海へ注ぐほか、大淀町から汲み上げて奈良の県営水道などの水として利用されています。また吉野川分水として、奈良盆地の田畑を潤しています。
- ・ ですから水の届くところのみなさんと、いつも交流をはかりながら考えて生きています。
- ・ そんな思いを「川上宣言」にあらわしました。一番最初には「私たち川上は、かけがえない水がつけられる場に暮らすものとして、下流にはいつもきれいな水を流します」と謳っています。4番目には、子どもたちに素直に感動できる場を提供するということが書かれています。
- ・ これら5つの宣言を具現化することを目的に取り組んでいます。
- ・ その具体的な活動としまして、原生林740haを「水源地の森」として購入し、保全しています。
- ・ 「源流」というテーマを中心に、人工林、手付かずの原生林、そして吉野川とその支流できれいな水にふれることができるフィールドがあります。森と水というものを題材に、さまざまなシーンが川上村では展開されています。
- ・ 特徴あるフィールドを子どもたちと歩いています。そして先ほどの辻谷館長らが、自らの経験、知恵や技を伝えています。
- ・ これはみんなで手をつなぎ、400年近い樹齢の木の大きさを体感しているところです。
- ・ これは間伐体験をとおして、人が手入れしなければならぬ木や森があること、その作業の一部を知ってもらっているところです。
- ・ 身近なところにも滝のある公園などがあり、ここで子どもらがペットボトルで水を持ち帰っている様子です。普段蛇口をひねればすぐ出てくる水が、どれだけ尊いものか、またさまざまな人々の仕事を経て、その水が家に届いていることを実感してもらっています。
- ・ これは川原でそうめん流しをしている様子ですが、こういうことを通しても、ここでは川の水がどれだけきれいかを感じてもらえると思います。
- ・ 時には、ネイチャーゲーム的なことをして、自然に対しての気づきの機会を持っていた

だいています。

- ・ 原生林である「水源地の森」をいっしょに歩いてもらうことも大切にしていますが、森と水の源流館からマイクロバスで1時間ほどかかるということもあり、多くの頻度ではありません。この森は奈良や和歌山へ届く水の出発点でもありますから、むやみやたらにこの森に入ることは奨励しておりませんが、できるだけ子どもさんたちには、この森、美しい川を体感してもらいたいと思っています。
- ・ 整備された散策道はなく、細い山の道を一列になって歩いてもらっています。
- ・ 源流の森にはなかなか行けないということもありますので、ビジターセンター的な役割で森と水の源流館が開設しました。
- ・ ご来館の学校には、みなさんの地域と川上村との関係や比較をしてもらいながら、森と水の源流館での展示を通じて興味を深めてもらおうとしています。
- ・ 一部の小学校3・4年生で使う教科書にも、川上村と森と水の源流館の取り組みは紹介され、そのお手伝いになればと、独自の副読本「水の旅のはなし」を制作・印刷し、毎年奈良県内の全校と紀の川沿いの市町村の小学校、4年生全員に無料配布してきました。これには一部に森守募金というみなさんからの募金を使わせていただいています。
- ・ それでも川上村までは遠いなぁとおっしゃられる方もいらっしゃいます。なかなか学校から出かけてくるのが難しいといわれる場合に、「出張源流教室」というものを少しでも吉野文化を伝えたいという思いでやっております。
- ・ 小難しい知識だけでなく、少しでも楽しいところから関心をもっていただき、気づきを深めてもらおうという工夫もしております。その一つに今年、「学べる屋台」というものをつくり、実際の川上村の木で作ったいろいろな小道具を引き出しに詰めて、森と水の源流館のスタッフが学校を訪ねて行って、森林環境教育のお手伝いをさせていただいています。
- ・ 見守る森もあれば、できるだけ木を使う、木を切っていないといけない森もあるということをしかりと説明しながら、二次林の整備で出た雑木の小枝を使ったクラフトから、間伐材でのベンチづくりまで、大小さまざまな木を使った工作体験もプログラムとして行っています。





【司会】

昨年度、小学校の学習において、川上村にお越しいただいた、あるいは、こちらから出張させていただきました学校の先生に、本日までご出席いただいております。

上牧町立上牧第二小学校の昨年度5年生を受けもたれていた井上先生です。

奈良県で始まった森林環境教育の最初の年度の指定校のうちの一校です。出張源流教室というかたちで、お手伝いをさせていただきました。1年間でどのような学習を展開されたか、ご苦労話、成果や課題、子どもたちの感想なども含めてお聞きしたいと思います。

【上牧町立上牧第二小学校 井上 昇 先生】



普段は子どもたちの前で話すことは慣れているのですが、このように大人の人ばかりの前で話をすることはほとんどありませんので、どれくらいまく話せるかと思いながら来ました。限られた時間の中で1年間の取り組みを十分お伝えし切れなないとは思いますが、できる限りお伝えできたらなと考えています。

小学校では、昨年度からの5年間で、全ての学校で森林環境教育をするということを決まっています。本校は西大和ニュータウンの南西一番端にある学校です。まわりにはわずかに自然の山や林などがありますが、子どもたちにとっては遊び場というよりは、どちらかというと近寄ってはいけないところとされていて、自然とふれあうことはないというのが本当のところ。学級園などでもミミズなどが出てきますとワァワァ言って、ものすごく珍しいことのように言っております。3人の学年の先生がいますが、われわれ自身が山のことを知らない、これが問題であるとも思います。

そんな中でどんなふうに始めたらよいか悩みましたが、5年生は毎年1学期の5月に宿泊学習に行くことが決まっています。このときをなんとかきっかけにすることができないものかということで、国立曽爾青少年自然の家に行き、相談しました。それで地元の森林組合の方に相談していただき、間伐体験をできないかということで考えていただきました。曽爾でも間伐体験は初めてということで、かなりがんばっていただき、いろいろやっていただきました。二人一組でノコギリで伐って、ロープで引くという作業を体験しました。伐ったあとに皮をむいたのですが、伐ったあとすぐには、こんなに簡単にめくれるということを知りませんでした。子どもたちはノコギリを持つということはありません。もちろん皮をむくということありませんので、みな初めての体験でした。そんな子どもたち

の感想を紹介しますと

「実際にやってみるとすごく大きくて、太くて、すごいなぁと思いました。」「いざ伐るとなるとこわいなぁ、倒れてこないかなぁと思いました。」「伐っている途中に、本当に伐れてる？力が足りないかなぁと思いました。」「伐り終わると、すごく時間がかかるなぁと思いました。」「木の皮はとてもザラザラで、皮をむいた木はとてもヌルヌルしていて、手袋は茶色くニユルニユルになりました。」「最初はこんな木、ロープで引っ張って倒れるのかなと思いました、引っ張ったとき、けっこう重いやん、引っ張れへんしと思いました。」「木の皮をむくなんて思ってなかったし、あんなにヘラでむけると思っていなかったけど、木の皮をむいていると生きている木はほんとうにきれいで、さわったら手がチュルチュルになった感じがした。」「木の汁がいっぱい出てきました。木を伐って、しばらくおいておくと、汁は出てこなかったけれど、木はきれいに光っていました。」「皮はベロベロと一発できれいに取れて気持ちよかったです。」「スギの木をさわってうれしくて、もっと木を伐りたかったです」というような感想を多くの子どもたちがもって、これが最初のきっかけとしては大変よかったです。

これをきっかけに子どもたちがもっと知っていこうということで、いろいろな疑問が出てきました。間伐体験という言葉は知っていても、何かわかりませんし、「木の種類や特徴って全く知らんな」とか、「育て方ってどうするのやろ」とか、「木の利用法ってどうするのやろ」とか、「森林組合って何やろ」とか、「森林面積とか木を売買するのはどうするのやろ」とか、どんどん質問が出てきて、それをみんなで手分けをして調べていこうということになりました。それと並行して、不思議な木をつくろうということで、粘土で作りました。いい作品がたくさんありました。持って帰った間伐の木をなんとか利用したいということで、20センチほどに切って、それを鉋で縦に割って、キャンプで鉋は使っていますが、たった20センチの木でも鉋で木を割るということは、子どもたちにとってものすごいことでありまして、鉛筆立てや写真立てやネームプレートなどにしましたが、硬くてうまくいかなかったことも良い経験になりました。また社会の時間では水涵養の話があったり、国語で森のおくりものなど、いろいろな教材があって、それらが並行しながら調べ学習をしていきます。子どもたちは、話を聞いたり、インターネットで調べたり、いろいろな形でそれをまとめて発表するかたちにしていけるのですが、それと並行して、「やっぱり実際の森にもっと触れないとあかん」ということで、葉山にあります青少年野外活動センター行って、グリーンオリエンテーリングをやって、木のあるところで、葉っぱを見て答えがわかるような問いかけなどや、葉っぱをとってきて、たたき染めなどをしました。

最初は学年の中で発表し、もっと全校広げようということで、1年生から6年生の子らに模造紙に書いて、1年生にもわかるように文章を考えて発表しました。さらに手直しをして、今度は保護者の人へ発表しました。

子どもたちは一生懸命勉強して、何も知らないところから、知識はものすごく増えたなぁと思います。しかし「ほんまのことって知らんなぁ」ということになりました。それで

「どうしようか」といって思いついたのが、子どもらが4年生のときに森と水の源流館に1回行っていきまして、「源流館に行って聞いてみようか」ということになりました。それで突然尋ねていくと、快く相談にのってくれまして、それまでの取り組みの話をして、「ほんまもんのことを知りたい」ということを伝えました。それで学校のほうにも打合せに来てもらって、話をしてもらおうことと、残っていた間伐材をなんとかうまく利用できないかということを検討していただきました。そして当日は教室でビデオを使って、山仕事を見せてもらったり、話を聞いた後、校庭に出て、ベンチ作りに取り組みました。3クラスで1クラスに1脚ずつ作りしました。みんなで交代でノコギリで木を切ったり、ネジで固定したりするのですが、なかなか硬くて難しいところを、館長さんがすばらしい手つきで鉋できれいに割ったりされて、子どもらの視線はみな釘付け状態でした。

子どもたちの感想を紹介します。

「質問に全部答えてもらいました。山の人にしかわからないようなことばかりで、へえーと思いました。」「木の運び方のビデオや写真を見て、思っていたよりずっと大きいなあと思いました。」「どうぞ小さいベンチだろうと思っていたら、すごい見本が出てきて、すごいとしか言いようがありませんでした。」「ノコギリで切るところは、切りはじめはラクだったけど、最後のところは難しかったです。」「ネジはスーっ入って思ったより難しくないなあと思いました。」「鉋でまっすぐに木を割る作業の素晴らしさと正確さはすごかったです」このように子どもたちが楽しみながら、たくさんのことを学ぶことができるということを感じました。今年はこれを受けて、もっと環境にいいことができないかということで、紙すきで和紙をつくったり、廃油で石鹸を作ったりしています。

こんなふうに、この1年あまりで、いろいろな経験ができたことと、知識を得ることができました。それから何よりいろいろな人に出会えたことがよかったです。ベンチは子どもたちにとって、自分たちのベンチというふうに思って、今も校庭に置いてあり、いつも利用しています。

なかなか自然を守ることが難しいことや、「リサイクルって難しいなあ」ということも今回わかりましたし、それから今回子どもたちの中にも、やはり「一人でやってもあかんあかん」、「こういうことはみんなで考えなあかんあかん」ということを確認できたと思います。



【司会】

王寺町立王寺小学校から川辺先生にお越しいただいております。昨年度、6年生では、学校にお伺いし、出張源流教室と木工体験をお手伝いさせていただき、秋には4年生に川上村にお越しいただき、蜻蛉の滝周辺での観察会を開催しました。

川辺先生には、学校の授業の中で、このような森林に触れることについてのご意見、効果、また実施されるまでのご苦労などもお聞きしたいと思います。

【王寺町立王寺小学校 川辺 恵美子 先生】



去年、王寺小学校も上牧第二小学校と同じく、森林環境教育体験学習推進校の指定を県から受けました。王寺小学校は平成14年度から県のエコスクール・モデル校として環境教育に取り組んでいますので、まずは1年目ですがやってみましょうということで森林環境教育に取り組みました。私は王寺小学校で環境教育部の環境教育を指導しております。県の指定では、一校一学年という規定がありましたので、私どもでは4年生を中心に取り組みました。

王寺町はJR大阪まで35分というとても便利なところにありまして、交通のまちと呼ばれています。ただ一つ、明神山というのがありまして、聖徳太子にゆかりのある小高い、大和平野は一望できる山があります。けれども川上村のような森林の奥深さというのは、どんなものか、子どもたちには2時間かかって、その地で体験しないとわからないことです。交通が便利なところということでベッドタウン化しております。近隣には畑も水田もありますし、家には緑もあります。しかし住宅が多いです。6年生の子どもたちは、教科書でも二酸化炭素のことや、テレビや新聞でも難しく言われています地球温暖化の主な原因である二酸化炭素を森林が吸収してくれること、一番効果的なものが森林だということを二酸化炭素の吸収の実験から学習しています。それで4年生を核に勉強を去年1年間進めたのですが、この機会に森林の役割と大切さと、人々とのつながり、どのように森林とかかわっているのか、そして水を育てている森林というものを子どもたちに理解してほしい、この機会に全学年に理解してほしいという気持ちから、1年生から6年生まで森林環境教育に取り組みました。

6年生が6月に館長さんらに来ていただき、体育館で子どもたち123名がいろいろな勉強をしました。まずビデオによる森林の素晴らしさ、雄大さというものをを見せていただきました。やっぱり王寺町の自然とは違うところを感じます。子どもたちは食い入るようにビデオを見ておりました。そして山で間伐された雑木の小枝やプレートを使って工作をさせていただきました。6年生は1学期に森林の大切さについて教科書で勉強しています。

子どもたちは世界的には森林を伐採することで、環境は悪化しているということを理解しています。しかし日本の山の木を伐ることは、伐って手入れをしないといけないということを子どもたちは薄々はわかっていますが、しっかりとわからないと思います。日本の森林を伐らないことが問題だということ整理して、育てていくこと、利用するということが、日本の森林の中で大切であるということを感じながら、間伐材で工作を体験させていただきました。そして山は学校だったという館長さんの話を聞き、生きる力ということを学びました。道具がないけれどもなんとか生きていく、山のものを自分たちの生きる力として利用していくということ学びました。食べ物がない、道具がないというところで生きていくための知恵を教えてくださいました。そして自分たちの体力や知恵をそこで育てていくということを学ばせていただきました。それは長年、山の中でご苦労とか生活していかれたところの力によるものだと、私たちは思いました。そういうふうなことでとても勉強させていただきましたが、子どもたちは「行きたいなぁ」って行っていました。

先日も夏休み中に、子供会の集まりに、森と水の源流館から出張をいただき、先ほどの「学べる屋台」も見せていただいたり、スギの間伐材で工作をしたり、子供会ともつながりをもたせていただきました。子どもたちがいろいろな面で山とふれあって、山の様子や役割を理解してくれて、広まってきているように思います。

1年生にも壁新聞で模造紙に書いて廊下に貼ったり、感想文を発表したりとかしていますので、他の学年の子も理解してくれていると思います。

10月10日には4年生が遠足で川上村に寄せていただきました。環境学習の体験の一環として蜻蛉の滝周辺の森林を歩きました。その後、森と水の源流館を見学させていただきました。子どもたちの感動は素晴らしいものだったと思います。たとえば、森に入って岩の間のコケから落ちる雫をみると子どもたちは歓声をあげました。手を持っていき、じわっと濡れたコケのところを確かめて、晴れているのに、これはやはり源流の一滴だと思っていました。子どもたちの足元にサワガニが歩くんです、それが元気よく横切り、子どもたちも足を止めました。横には水が流れています。これを見て子どもたちは本当に心が安らぐ思いがしたのではないかと思います。川の水をすくって飲んでいました。飲めるんです。スタッフの方がちゃんと測ってくれましたので安心して飲めました。子どもたちが喜んで飲んでいました。そして自分たちが持参したペットボトルに水を詰めて、おみやげに持って帰りました。やはりこのような体験はここに行かなければできないなと思います。

王寺町を流れる川は大和川、そして葛下川というのがありまして、環境学習の一環で、毎年一年に何回か水を測りに行きます。やはり100ppmで、大和川はみなさんご存知のようにワースト1から2、3と、少しはよくなっていっているようですが、今度は他が汚れてきたということでワースト3です。少しは喜ばしいことですが、下水道がだいぶ完備されていったということもあるかと思えます。それでも毎年100ppmです。学校の近くを流れる葛下川は50ppmで、大和川ほどではないですが汚れています。メダカもいません。小さい魚はいますが、やはり飲めるものではありませんし、入れるものではありません。

るので、森の中で育まれた水の素晴らしさを川上村で体験できたと思います。とても素晴らしい体験をさせていただきまして、よかったなと思っているところです。

王寺町にも吉野川分水が入っておりますので、それとのつながりがあるということも子どもたちと勉強しております。子どもたちは豊かな自然にふれられたこと、温暖化を防止するための二酸化炭素の吸収源ということで森林を大切にしていかなければならないということ、その前にしっかりと手入れをしなければならないということ、そして森林環境税のことなど、学校での森林環境学習で体験をすることの重要性を理解してくれたと思っています。

私たち教師もたくさん勉強させていただきました。素晴らしい体験であったと思います。森林環境教育は1年で終わらずに、ずっと環境教育の一部として続けていって、地球温暖化防止に向け、みんながひとりひとり毎日考えていかなければならないことだと思います。いくら努力しても、しても、温室効果ガスは日本では上がっていて、なかなか京都議定書のとおりにはいかない、削減のための役割を果たしているのはやはり森林であろうかと思っています。だからその森林を大切にしていかなければならないと子どもたちと話しております。ありがとうございました。



【司会】

今日は、たくさんの方々にお越しいただき、前先生にはじまって、いろいろな方々の観点からお話を聞かせていただき、最後に「山から何を学ぶことができるか」について、まとめてみたいと思っておりましたが、うまくまとめることはできません。ただ川上村の山、森、そしてそこに生まれる水の流れをとおして、いろいろな方と出会い、つながりがしっかりできているということに、多くの方々と、川上の山に感謝したいとあらためて感じております。みなさん、ありがとうございました。

## おわりに

---

川上村副村長

財団法人 吉野川紀の川源流物語 副理事長

栗山 忠昭

大変お疲れ様でございました。そして最後まで熱心にお付き合いをいただきましたことを心より厚く御礼を申し上げます。今回のこのシンポジウム、こんなにたくさんの方々にご参加いただけましたこと本当に感謝申し上げます。

前先生にはいつものことながら、ユーモアをたっぷりに吉野の魅力、そして源流川上の魅力、その奥深さを語っていただきました。今後も先生にはさまざまなところでご活躍をいただき、いろいろなところでこの吉野のこと、あるいは源流のことを語っていただければありがたいと思っております。井上先生、川辺先生には、ありがとうございます。私らの知らないところで随分、川上と交流をしていただき、再三来ていただいていることに感謝申し上げますし、子どもさんたちに、そんな魅力をしっかり伝えていただいていることにも感謝申し上げます。未永く、引き続きしぶとくお付き合いいただきたいと思いますので、今後ともよろしく願います。

すでにご承知のとおり、川上村は平成6年に「水源地の村づくり」ということで、「樹と水と人の共生」を掲げました。私らが誇りに思っておりますのは、どこの町村よりも早く、環境の問題とか、自然の問題とかに取り組んだと自負しております。しかしながら偉そうに申しまして、わが村は人口たった2000人なんです。その取り組みはまだまだ小さいです。そして声も小さいです。今日お集まりいただきましたみなさん方は、さまざまなところでご活躍をされている方ばかりだと思いますから、ぜひお帰りになられましたら、こういった取り組みの輪を広げていただければと思います。もちろん私は一生懸命、水源地の村を守っていきたいと思いますので、応援をしていただきたいと思います。

最後になりましたが、今回のシンポジウムをご支援いただいた社団法人近畿建設協会様、ご後援いただきました国土交通省近畿地方整備局紀の川ダム統合管理事務所様、奈良県教育委員会様、橿原ロータリークラブ様、吉野川紀の川流域協議会様、そしていつもいつも森と水の源流館に声援を送っていただいておりますNPO法人奈良21世紀フォーラムのみなさまには、高いところからではございますが、あらためてお礼を申し上げまして、今回のシンポジウムを閉じたいと思います。本当にありがとうございました。



〒639-3553 奈良県吉野郡川上村宮の平  
TEL 0746-52-0888 FAX 0746-52-0388  
<http://www.genryuu.or.jp>